

ときを越え
受け継がれるもの

石包丁

Ⅱ 胆沢区南都田字清水下 Ⅱ

古代において「水陸万頃」とたたえられた胆沢平野での稲作の歴史は古く、2千年前の弥生時代中期には始まっていたと考えられる。清水下遺跡で見つかった石包丁はその証拠の一つである。

石包丁は包丁の名を持つ調理器具ではなく、稲の穂を摘み取るための道具である。昭和52年の冬、かんがい用水の工事中に2つの石包丁が見つかった。掘り上げた土砂から発見され、地表下1メートルほどの地層にあったと推定される。縞模様の浮かぶ石は阿武隈山地（宮城県・群馬県）が産地と思われる粘板岩で、緩やかに湾曲した背面などから東北地方南部で製作され、この地にもたらされたと考えられる。

石包丁の発見はこれが県内初であり、ほかには胆沢城跡などから欠損品が出土するのみである。石包丁のような弥生時代の遺物の多くは今も、揺れる稲穂の下に眠っているのかもしれない。



1



2

1 長さ19.6cm、幅5.0cm、厚さ0.7cm、重量108g。現在の鎌のような柄は無く、中央の穴に紐をつけて指を通して持ったという 2 2点発見されたうち、1点が胆沢文化創造センター内の郷土資料館に展示されている（もう1点は県立博物館展示）

広告